『封神演義』の元帥神

二階堂　善　弘

On Marshal Gods in "*Fengshen Yanyi*"

NIKAIDO Yoshihiro

The characters that appear in "*Fengshen Yanyi*" are either recorded in history books, or developed by later beliefs as gods and goddesses, or due to authorial creation. This thesis notes the emergence of Marshal Gods in "*Fengshen Yanyi*". The origin of Marshal Gods is investigated, while other sources are investigated in relation to their appearance.

Keyword: Daoism, Popular Religion, Popular Novels, Chinese temples
キーワード：道教、民間信仰、通俗小説、華人廟

前　言

『封神演義』は殷周時代を舞台にした小説である。しかし、歴史書に記載のある人物のほか、後世に信仰が発展した神仙、さらには小説オリジナルの人物なども登場し、その構成はかなり複雑になっている。

たとえば、紂王の佞臣として費仲が登場するが、この人物は実際に史書にその名が見え、また『武王伐紂平話』などの先行小説にも出てくる人物である。しかし、同じく佞臣で、ほぼ一緒に登場する尤渾については、他の資料には見えず、『封神演義』の作者たちのオリジナルな創作の人物であると考えられる。このように、作為的に人物を構成することが、『封神演義』ではよく行われる。

黄飛虎は歴史書にはその名は見えない。一応、先行する『武王伐紂平話』には登場している。ただ、『武王伐紂平話』では、黄飛虎はそれほど重要な人物ではない。ところが、『封神演義』では封神される東岳大帝の役割に引きずられるためか、全編にわたって活躍する人物となっている。聞仲は黄飛虎とともに重要な役割を担う人物であるが、先行する小説にも名は見えず、『封神演義』のオリジナルな登場人物であると考えられる。その構成は、かなり複雑なものとなっている。

このような登場人物のなかから、本論では元帥神に類する人物に焦点を当てて、その背景について考察してみたい[1)]。

1）本論では、『封神演義』の引用については、筆者監訳本（二階堂・山下・中塚・二ノ宮 2017-2018年）を用いた。ま

重慶老君洞の元帥神

1．二十四天君の内訳

『封神演義』の封神の段で、雷部の天君に封じられるのは二十四天君となっている。そのメンバーは次の通りである[2)]。

鄧天君（鄧忠）、辛天君（辛環）、張天君（張節）、陶天君（陶栄）
龐天君（龐弘）、劉天君（劉甫）、苟天君（苟章）、畢天君（畢環）
秦天君（秦完）、趙天君（趙江）、董天君（董全）、袁天君（袁角）
李天君（李徳）、孫天君（孫良）、百天君（百礼）、王天君（王変）
姚天君（姚斌）、張天君（張紹）、黄天君（黄庚）、金天君（金素）
吉天君（吉立）、余天君（余慶）、閃電神（金光聖母）、助風神（菡芝仙）

そもそも、この「二十四」という数の根拠が不明である。一般に、道観などに天君や元帥神が祭祀される場合、その多くは「十二天君」である。一方で道教経典などによく見られる数は、「三十六元帥」である。中間の数字というより、単純に、十二天君を倍にしたものと推察する。

もっとも、来源を仏教に求めるのであれば、仏教寺院でよく見かける「二十四諸天」と数は一致する[3)]。あるいは、こちらが根拠になっている可能性もある。

た元帥神については、筆者の元帥神に関する著作（二階堂 2006）を適宜参照している。

2）筆者監訳本（二階堂・山下・中塚・二ノ宮 2017-2018年）第４巻434-435頁参照。

3）二十四諸天については、筆者論文（二階堂 2019: 135-145）を参照。

蘇州の玄妙観の三清殿には、道教の雷部十二天君を祀るが、そのメンバーは次の通りである[4]。

鄧天君、辛天君、張天君、陶天君、龐天君、劉天君
苟天君、畢天君、岳天君、温天君、殷天君、朱天君

これと『封神演義』の二十四天君を比較すると、鄧天君、辛天君、張天君、陶天君、龐天君、劉天君、苟天君、畢天君までは一致する。もっとも、『封神演義』では意図的に名前のほうは変えられてしまっている。

そして玄妙観の殷天君とは、殷の太子殷郊のことで、物語ではかなり重要な役割で登場する。これも元帥神のひとりとなる。温天君は、殷郊の配下の温良として登場する。

鄧天君、辛天君などは、普化天尊となる聞仲に絡む人物として登場する。『封神演義』の第四十二回で、聞仲は黄花山で鄧忠、辛環、張節、陶栄と会い、彼らは聞仲の配下となる。その場面は次の通りである。

> 鄧忠が答える。「この山は黄花山と言い、われら四人は兄弟の契りを結んで何年も経ちます。それがしは姓を鄧、名を忠と申します。次兄は辛環、三兄は張節、末弟は陶栄です。世の中では諸侯の謀反が頻発しているため、この山を借りの住まいとし、身を寄せる場所といたしました。しかし、これはわれらの本意ではありません」。これを聞き、聞仲が言う。「そなたらは、わしに従って西岐討伐に参加せよ。功を立てたあかつきには、みな朝廷の臣下として取り立てよう。なにゆえ、このような山林におぬしらの武勇を埋もれさせ、本来の武名を無にすることがあろうか」[5]。

龐天君や劉天君などは、殷洪に絡む人物として登場する。第五十九回で二龍山の龐弘、劉甫、苟章、畢環は殷洪に会って、これに従うことになる。

> うち一人が言った。「われらはここ二龍山黄峰嶺の山賊です。私の名は龐弘、この者は劉甫、この者は苟章、この者は畢環です」。殷洪は言った。「そなたたち四人は、凡人とは思えない。まさに当世の豪傑であろう。わたしに付き従って西岐に赴き、武王による紂王征伐に加わらないか」[6]。

『道法会元』などの道教経典に見える名は、鄧天君は「鄧伯温」、辛天君は「辛漢臣」、張天君は「張元伯」、陶天君は「陶元信」、龐天君は「龐煜」、劉天君は「劉俊」、苟天君は「苟雷吉」、畢天君は「畢宗遠」となる。もっとも、同じ道教経典のなかで異なる表記もよく見られる[7]。

4）該当の十二天君像については、筆者「蘇州玄妙観の十二天君について」（二階堂 2009: 141-153）参照。
5）筆者監訳本（二階堂・山下・中塚・二ノ宮 2017-2018年）第2巻325-326頁参照。
6）筆者監訳本（二階堂・山下・中塚・二ノ宮 2017-2018年）第3巻167-168頁参照。
7）これについては、筆者著作第三章（二階堂 2006: 77-163）参照。

つまり、二十四天君のうち、鄧天君、辛天君、張天君、陶天君、龐天君、劉天君、苟天君、畢天君の八名の天君は、一般に道教経典に見える元帥神に依拠したものといえよう。蘇州の玄妙観をはじめ、武当山や龍虎山の道観においても、これらの元帥神の姿はよく目にする。

それに続く、秦天君、趙天君、董天君、袁天君、孫天君、百天君、王天君、姚天君、張天君、それに金光聖母は、所謂「十天君」として、『封神演義』の物語で重要な役割を持つ。

金鰲島の十天君は、太師聞仲の依頼により、殷に味方して周と敵対する。そのときに、一種の異空間である「十絶陣」を設ける。この十絶陣の箇所は、『封神演義』前半でも特にインパクトの強い場面である。その十絶陣は次の通りとなる。

天絶陣（秦天君）
地烈陣（趙天君）
風吼陣（董天君）
寒氷陣（袁天君）
金光陣（金光聖母）
化血陣（孫天君）
烈焔陣（百天君）
落魂陣（姚天君）
紅水陣（王天君）
紅沙陣（張天君）

これを二十四天君の並びと比較すると、少し入れ替えがあるのと同時に、金光聖母が李天君に代わって入っており、やや奇妙な並びとなっている。

筆者は、もともと李天君は十絶陣担当の天君のひとりであったと考えている。李天君は、『封神演義』の他の部分には登場しないにもかかわらず、突然、十天君に並ぶ形で加入するのであり、まったくもって不可解な人物である。

そもそも、金光聖母の位置にちょうど入れ替わるような形で、李天君が配されている。これはすなわち、当初の構想では、李天君が陣を担当していたことを示すものはないか。ところが、何かの理由で、金光聖母が担当となった。これにより、齟齬が生じてしまったのであろう。

金光聖母は、道教や民間信仰でよく雷部の神々として祭祀される電母である。雷公、風伯、雨師と組み合わされて、天候を管理する神となっている。すなわち、十天君のなかで、金光聖母だけが他の資料に基づく神となっている。

実際に、華人廟のなかで金光聖母を見ることは多い。もともと電母を祀るべきところ、『封神演義』の知名度によって、金光聖母になってしまっている例は台湾でもマレーシアでもよく見るものである。

おそらく、秦天君、趙天君、董天君、袁天君、孫天君、百天君、王天君、姚天君、張天君、李天君の十天君は、『封神演義』の作者たちの設定によるオリジナルな人物であり、十絶陣のためだけに生み出されたものと考えられる。さらに李天君は、十絶陣から外されたために、そもそも由来不明な天君となっ

てしまった。

以前に、筆者は王天君が王霊官に由来する神ではないかと推察したが、それは誤った認識であると思われ、訂正したい。すなわち金光聖母を除いた九天君に、李天君を加えた十天君が、『封神演義』のオリジナルな人物であると考えられる。

むろん、『道法会元』などの道教経典のなかには、十天君と同じ姓を持つ元帥神もある。また「十大元帥」という形で十名の元帥神が配されることもある。しかし、『封神演義』の作者たちの教養レベルからも、そこまで資料を精査していたとは、とても考えられない。『三教搜神大全』などの一般レベルの資料に見えない限りは、『封神演義』の作者のオリジナルと断定して構わないと思う。

また秦天君は、明刊本第九十九回の封神表では、程天君となっている。あるいは、こちらの名のほうが本来のものかもしれない。

そもそも、異空間である陣を配するということは、『武王伐紂平話』の巻下において、崇侯虎が構える「五星寨」と、姜子牙が敷く「五武寨」に基づくものであると考える。五星寨は次の通りである。

第一、木星寨、飛廉下
第二、水星寨、申屠豹下
第三、火星寨、薛延沱下
第四、金星寨、尉遲桓下
第五、土星寨、彭挙下

元帥神とは異なるが、この『武王伐紂平話』の「申屠豹」が、のちに『封神演義』の「申公豹」に発展したものであると考えられる。

この五武寨を、単純に倍にしたものが十絶陣であると考えるが、あるいは、地獄の神である十王がむしろ念頭にあったかもしれない。ただ、十王と十天君は、なかなか名称が一致しない。秦天君は秦広王に近いが、これも、もとが程天君であったとすると、ますます名称の一致点は見いだしにくくなる。

おそらく、『楊家将演義』などの「楊家将」故事で語られる「九宮八卦陣」も、十絶陣に影響を与えているものと考えられる。ただ、異空間としての姿は、十絶陣、また九曲黄河陣のほうが優れていると考える。

吉天君、余天君のふたりは、ずっと聞仲に従う配下であり、こちらも道教経典に依拠する元帥とは考えられない。普化天尊の配下の神に基づく可能性もあるが、特定の神には結びつきにくい者である。黄天君、金天君も、同姓の元帥神は存在しているものの、それに依拠したものとは考えられない。

閃電神である金光聖母と、助風神の菡芝仙については、これも判断が難しいものとなっている。先にも書いた通り、金光聖母は明らかに電母を模したものである。鏡で雷電を発するのは、電母と金光聖母の共通点である。

助風神の菡芝仙については、風伯か、あるいは『西遊記』に見える風婆婆、巽二郎、推雲童子、布霧郎君のうち、風婆婆が近いと思われる。これらの神から発想したものであることは間違いないと思われる。すなわち、金光聖母と菡芝仙は、民間信仰の天候を司る神に由来するものと考えてよいだろう。

すなわち、雷部二十四天君のうち、鄧天君、辛天君、張天君、陶天君、龐天君、劉天君、苟天君、畢天君は、道教の雷部の元帥神に由来するものである。そして、秦天君、趙天君、董天君、袁天君、李天君、孫天君、百天君、王天君、姚天君、張天君、黄天君、金天君、吉天君、余天君は、『封神演義』の作者たちの創作によるものである。また金光聖母、菡芝仙は、民間信仰の天候を司る神に由来するものである。

また、二十四天君が二十四諸天に基づき、十天君が十王をベースしているとすれば、『封神演義』の作者たちの意識は、むしろ仏教のほうに傾いていると言えるかもしれない。

このように、何かしらの信仰に基づくものと、作者たちのオリジナルが混在しているところが、『封神演義』の面倒な点である。また、『封神演義』が演劇などを通して一般に広まってしまったため、今度はその影響による信仰も現れていることが、事態をより複雑にしている。

たとえばマレーシア、ペナン島の天公壇という廟では、哪吒や雷震子と並んで、金光聖母、菡芝仙が一緒に祭祀されている[8)]。また中国の南方では、実際に「金光聖母廟」なども存在しているようである[9)]。本来は電母を祀るべき場所であるはずが、『封神演義』の影響で違った名称になってしまったのであろう。

現在の華人廟を調査する場合、『封神演義』のどの神仙がそれ以前から存在しているものなのか、あるいはどの神がオリジナルによるものなのか、頭に入れておかないと、その来歴自体不明になってしまう。

2．趙公明と殷郊

二十四天君のほかにも、『封神演義』には多くの元帥神が登場している。そのままの名前で登場しているのは、趙公明と殷郊であり、この両者については考察の必要もないほどである。殷郊、すなわち殷元帥が、蘇州の玄妙観に祀られていることについては、先にも少しふれた通りである[10)]。

趙公明の姿は、道教や民間信仰における趙元帥の形象そのままである。黒い虎に乗り、金鞭を持つその姿は共通するものである。

ただ、『三教搜神大全』などの『封神演義』以前の由来を記した資料を参照すると、『封神演義』の趙公明に関する話は、ほぼ作者たちのオリジナルであることがわかる。

『封神演義』では、趙公明は峨眉山の道士であり、太師聞仲と十天君に協力して周軍に対抗する。妹に雲霄娘娘、瓊霄娘娘、碧霄娘娘がある。有する定海珠の威力は強力で、崑崙の十二仙も圧倒する。ただ、陸圧道人の計により呪殺される。

『三教搜神大全』などの資料では、趙公明は秦の時代の人物とされる。終南山の道士で、圧政を避けて山に入り、修行したのちに正一玄壇元帥に任じられる。時代も、設定もずいぶん変えられてしまっている。また三娘娘とは一切、関係がない。

8）ペナン島の天公壇については、筆者（二階堂 2018: 585-592）参照。

9）福建福州鼓楼区に実際に存在するとのことである。

10）殷元帥や趙元帥については、筆者著作第四章（二階堂 2006: 165-245）参照。

殷元帥についても、『封神演義』とそれ以前の資料では、その形象自体は変わっていない。殷元帥の姿は、首に髑髏の瓔珞を着け、手に鐘を持ち、三頭六臂の姿になる。

『三教搜神大全』や『武王伐紂平話』においても、殷郊は殷の紂王の子であることになっている。ただ弟である殷洪の名は見えない。殷郊は姜子牙と会い、周軍に味方して殷の軍を苦しめる役割を負う。すなわち、元来の物語では、殷郊は最後まで周の将軍として戦い、妲己を滅ぼすのである。

『封神演義』ではこの結末は逆となり、殷郊は途中で申公豹にそそのかされ、殷側に味方して滅ぼされることとなる。殷郊もまた同じ顛末である。

『封神演義』におけるこの改作は不可解な面も多いが、確かに物語上、最後に「殷の太子」であった殷郊が生きていては都合が悪い。士大夫の意識からすれば、周の武王は、王位を退いて殷郊に譲らねばならないところである。しかし、殷周交代という事実、また『封神演義』の全体の物語からもそれは容認できず、やむなく殷郊を途中で殺させて、辻褄を合わせたものと考えられる。

ただ、この改作は、『封神演義』の作者の意図とはまた異なり、『封神演義』という作品の深みを増すこととなった。

『封神演義』の物語は、すべて「天命」で片付けるご都合主義な箇所がいくつもある。殷郊と殷洪の兄弟も、封神榜にその名が載せられており、周軍の武将として活躍したあと、陣没して封神されるという運命であったのであろう。しかし、殷郊兄弟はこの運命に逆らって、さらに自分らの誓約による運命に縛られることとなった。天命は決まっていても、みずからの意志によってある程度は改変できるということを、殷郊兄弟の行動は示し、それが「運命一辺倒」の物語にやや異なった色彩を加えている[11)]。

もっとも、物語の都合上、本来の殷郊の代わりをする役の人物は別に必要となり、これが哪吒にあたえられることとなる。哪吒の兄弟もまた、同様の役割で周軍において活躍することとなる。

趙公明は、『道法会元』などの道教側の資料を見ても、早くから財神として扱われている神である。趙玄壇、あるいは玄壇趙元帥ともされる。また、殷郊は太歳神として信仰されていた。太歳殷元帥という呼称もある。

『封神演義』第九十九回で、趙公明とともに財神に任じられるのは次の者たちである。

招宝天尊蕭昇、納珍天尊曹宝
招財使者陳九公、和利市仙官姚少司

趙公明と、蕭昇、曹宝、陳九公、姚少司の五名を、「五路財神」として祀ることは、いまでは中華圏のあちこちで広く行われている。しかし、趙公明以外は、もともと財神でもなんでもない人物である。

財神を五柱とするのは、それまで財神として知られていた五顕神の影響があるであろう。のちに五顕神の信仰はむしろ衰えていき、この五路財神に取って代わられた感もある。

もっとも、財神としては関帝と比干の勢いも強く、趙公明、比干、関帝を「財神殿」に祭祀することは広く行われている。比率としてはこちらのほうが高いかもしれない。

11）これについては岩崎氏の論文（岩崎 2016: 107-119）においても詳しく論じられている。

『封神演義』第六十三回で、殷郊が部下とする温良、馬善のふたりも、元帥神に由来する人物である。すなわち、温太保として知られる温元帥、正一霊官として有名な、馬元帥華光である。

> 殷郊は言った。「おふたかたのお名前は何とおっしゃるのですか」青い顔の方が言った。「それがし、姓は温、名は良でございます。そっちの白い顔のは、姓は馬、名は善です」。殷郊は言った。「おふたかたの姿を拝見するに、凡人とは思えず、英雄の気概をお持ちのようだ。私と一緒に西岐に行き、武王を助けて紂王を討ち、功を立てないか」[12)]。

ただ、両名とも「三眼六臂」とされており、これはもとの元帥と姿が異なっている。物語のなかで、哪吒には「三人で眼が九つか」と揶揄されている。

実のところ、馬元帥は三眼ではあるが、六臂ではない。温元帥は時に三眼の像で描かれることもあるが、基本的に二眼で、また六臂ではない。また馬元帥の風火輪は、哪吒が乗っている。もはや別人と言えるほど、温良と馬善の二名については、改変が加えられている。

温元帥と馬元帥は、『三教搜神大全』にも伝が見え、また四大元帥のメンバーともされている。一般に、道教の四大元帥と言えば、温元帥、関元帥、馬元帥、趙元帥であり、関元帥を除く三名までは、『封神演義』で姿をやや変えて登場しているわけである。

関元帥は、さすがに三国の関羽なので、登場させるわけにはいかなかったようだ。しかし、関羽の役割は、黄飛虎に部分的に任されているようである。黄飛虎が『封神演義』で「五関を越える」故事を有していたり、『武王伐紂平話』では、それほど重要な役割でもなかったにもかかわらず、武勇の将の代表として活躍することになるのは、作者たちが意図的に改変を加えているからであると考えられる。

黄飛虎は東岳大帝に封じられるので、温元帥である温良と縁がありそうなものであるが、あまり注意されない。馬善のほうは、火の神であることは考慮されて、正体が「瑠璃灯」となっていたり、また燃灯道人との縁が強調されるのは、仏教よりの馬元帥華光であるという背景に沿ったものと考えられる。

道教の元帥神の多くは、密教の影響を受けて成立したものである。

殷元帥は、大威徳明王がその源流であると考えられる。すなわち、ヤマーンタカである。馬元帥は、烏枢沙摩明王がその源流であると思われる。すなわち、ウッチェシュマである。また趙元帥は、大黒天がその源流であると考えられる。すなわち、マハー・カーラである。

ただ、『封神演義』の時代においては、すでにこれらの神々は完全に道教神となっており、物語上も、それほど仏教との関連は注意されていない。先にもふれた、馬善の燃灯道人との関係と、趙公明の持つ定海珠が仏門に関係あり、とされる程度である。

そもそもの由来をたどれば、李靖は毘沙門天クベーラ神であるし、哪吒は毘沙門の子のナラクーバラ神であるし、金吒は軍荼利明王クンダリーであるし、実際には、『封神演義』には作者が意識しないまま、ヒンドゥー神話との深い関わりが生じている。

12）筆者監訳本（二階堂・山下・中塚・二ノ宮 2017-2018年）第３巻235頁参照。

3．九龍島の四聖

『封神演義』には、道教や民間信仰に由来するのか、作者たちのオリジナルなのか、判断に苦しむ登場人物も多い。

なかでも九龍島の四聖は、非常に判断が難しい人物である。すなわち、王魔、楊森、高友乾、李興覇の四名である。『封神演義』第三十八回では次のように描かれる。

> この四人の道士とは四聖である。封神榜にもその名を連ねる。一番上を王魔、二番目を楊森、三番目を高友乾、末を李興覇と言い、霊霄殿の四将である。（略）四人は朝歌に到着すると水遁の術を収め城内に向う。四人を見ると兵士も民衆も朝歌の人々はみなが恐れおののく。王魔は頭に一字巾を結び、水合服を身に付け、顔は満月のように丸い。楊森は蓮を格子形にした頭陀袋のようなものを被り、黒い服をまとう。その顔は鍋底のように黒く、鬚は朱砂のように赤く、眉は黄色い。高友乾は髻を二つ結び、赤い服を着る。その顔は藍靛のごとく青く、髪は硃砂のように赤く、上下の歯が牙のようにのびる。李興覇は魚尾金冠を頭に被り、淡い黄色の服をまとう。顔は赤黒く、長いひげを蓄える。四聖はみな一丈五、六尺もの身長があり、ゆっくり身体を揺らして歩く。四聖を見た人々はみな驚きを隠せない[13]。

そして四聖は、それぞれ狴犴、狻猊、花斑豹、猙獰という神獣に乗っている。

道教や民間信仰において、四名で一組になっている元帥神としては、まず温元帥、関元帥、馬元帥、趙元帥の所謂「四大元帥」が想定される。ただ、『封神演義』には趙公明などはそのまま出ており、かつ、馬善と温良も登場しており、こちらの四大元帥とは無関係であると考えられる。

道教や民間信仰で四聖といった場合、別にまた北極四聖が想起される。すなわち、天蓬元帥、天猷元帥、真武神、黒煞神の四柱の神である。九龍島の四聖は、恐ろしげな姿をしており、この点では北極四聖、特に天蓬、天猷と似ている面がある。もっとも、これは四聖に限らず、多くの『封神演義』の登場人物に共通するものであるが。

しかしながら、『封神演義』では「霊霄殿の四将」ということを強調する。すなわち、封神されたあとの地位を前面に押しだしている。北極四聖は、本来は紫微大帝を守る北極の武将であるものの、玉皇大帝の霊霄殿を守護するものではない。もっとも、玉皇大帝を補佐するという記載は、経典類のなかには見えている。

四名の元帥神の組み合わせで、十二天君内部の組み合わせとはまた別に考えられるのは、崔、盧、鄧、竇の四将がある。これも北極四聖に続くもので、「四大天丁」とも称される。『法海遺珠』などの道教経典にその名が見える。ただ、『封神演義』の作者が道教経典を参照していたとは思えないので、この四将は当たらないかもしれない。

もっともこの四将の名は『水滸伝』『金瓶梅』にも見えていることから、通俗小説の作者たちが知って

13）筆者監訳本（二階堂・山下・中塚・二ノ宮 2017-2018年）第2巻240-241頁参照。

いても問題はない。

とはいえ、『封神演義』の場合、名前はともかく、姓は流用しつつ、中身を変えるというパターンが多く見られる。この場合、姓を変えていることから、おそらくは「四聖」という名称だけを流用していると考える。

おそらく、北極四聖に基づくものの、限りなくオリジナルに近い設定を施されたのが九龍島の四聖であろう。姓名の設定も、ややおざなりな感がある。

結　語

これまで、『封神演義』に登場するする元帥神に由来すると思われる人物をみてきたが、ここではまた、そのほかの人物と、その影響についてもふれておきたい。

『封神演義』で活躍する武神系の人物としては、当然ながら哪吒と楊戩も重要な登場人物である。物語中では、哪吒が目立ちすぎて、父の李靖や、兄の金吒、木吒はやや脇に置かれることになってしまっている。

ただ哪吒太子は、どちらかというと元帥神の上位に存在する神である。もっとも、台湾でよく知られた称号は、「中壇元帥」である。元帥神のひとりとして扱うことも可能であると考える。

楊戩も、武神としては上位の存在で、むしろ元帥神を率いて戦うほうであろう。二郎神としての楊戩となると、ますますその傾向が強くなる。

また『西遊記』における哪吒太子と二郎神は、『封神演義』の哪吒と楊戩と、かなり異なる形象を有している。本来は、『西遊記』に描かれる姿が民間信仰において標準的なものであったが、『封神演義』が民間に流行してしまったため、『封神演義』のほうがむしろ廟の標準的な像となってしまった。たとえば、哪吒太子は風火輪には乗っていなかった。『西遊記』の古い版本の挿絵などは、そう描かれている。しかし、『封神演義』の流行以後では、哪吒太子が風火輪に乗っていない像は、ほとんど見られなくなってしまった。

元から明の民間信仰において、風火輪に乗り、金磚を持っていたのは華光大帝である。しかし、華光の信仰が衰えたため、風火輪といえば哪吒のこととなってしまった。

『西遊記』の二郎神も、『封神演義』の楊戩も、本来は目がふたつであったはずである。しかし、いまでは三ツ目であることが知られている。どの時点でこのように変わったかは不明である。趙昱が二郎神であったときは、ほぼ二眼で描かれる。『封神演義』の挿絵もほぼ同様である。

三ツ目であるのは、これも華光の特色である。ただ、二郎神が三ツ目ということになり、こちらも知られなくなってしまった。清朝になると、一般的に二郎神も楊戩も、三ツ目が特色という形になってしまっている。

現在では、道教の道観ではまだ元帥神の像がよく残されている。しかし、一般の廟では、見かけることが少なくなっている。多くは、武神については哪吒や雷震子など、『封神演義』の人物に置き換わってしまっている。むろん、趙公明などの元帥神は廟で見かけることも多いが、財神としての扱いがほとんどである。

すなわち、関帝や趙玄壇などの、元帥神でも著名な神は、その後、元帥神としてではなく、財神など、別の機能を有する神としても発展していった。それとは別に、元帥神自体は廟で祀られることは少なくなっていった。その代わりを埋めたのは、『封神演義』の登場人物である。

たとえば、台湾屏東の慈鳳宮で、玉皇大帝を守護する位置にあるのは、趙公明、王霊官、楊戩、それに李靖である。本来、ここには四大元帥が置かれるのが当然であると考える。しかし、王霊官はともかく、そのほかは、趙公明、楊戩、李靖という『封神演義』の登場人物に置き換わってしまっている。またこの楊戩像は、手に金磚を持っていて、ある意味では、華光と楊戩を足した形の像になっている。さらに、李天王となると、もうこれは、そもそも道教系の武神でもなく、さらに元帥神でもない。

先にも少しふれた、マレーシアペナン島の天公壇では、玉皇大帝の前に、黄天化、土行孫、雷震子、哪吒、伯邑考、殷郊、金光聖母、菡芝仙、赤松子、祝融、雲中君、華光大帝の像を据えている。

言うまでもなく、黄天化、土行孫、雷震子、哪吒、伯邑考、殷郊、金光聖母、菡芝仙は『封神演義』の登場人物である。

本来は、玉皇大帝の前には元帥神などが控えるはずなのであろう。しかし、ここでもまた『封神演義』の登場人物の像が置かれることになってしまっている。

羽の生えた鳥のようなクチバシを持つ神というと、雷公か、あるいは鄧天君や辛天君などの元帥神が想起される。しかし、現在の中華圏の廟においては、圧倒的に雷震子が祀られる比率が高くなっている。

東岳大帝を祀る廟に、その子として炳霊公の像が置かれていることもよく見られる。だが、その像の姿は金錘を持つもので、明らかに黄天化の像となっている。もともとは泰山三郎としての姿があったはずであるが、『封神演義』の流行により、黄天化の姿のほうが一般的になってしまったのである。

このように、かつて元帥神が占めていた武神の代表という形を、『封神演義』の登場人物が、どんどん地位を奪う形で入れ替わっている現象は、非常に興味深い。

とはいえ、『封神演義』にも、先に見たとおり、多くの元帥神が登場しているわけである。なかでも、趙公明や殷郊は存在感があり、現在でも廟に祀られているわけである。

しかし、『封神演義』の物語において目立った活躍がない場合、現在の信仰への影響が小さくなってしまうということもある。

たとえば、華光大帝であるが、一応は『封神演義』においては馬善として登場している。温元帥である温良も同様である。しかし、設定ではほとんど別の人物とも思えるほど違っており、また物語上、それほど目立つ存在ではない。そのために、これらの人物は、後世においてもあまり意識されることはなかった。

逆に、呂岳のように、設定を元帥神などから借りてきておりながら、ほぼオリジナルな設定の人物が、物語上かなり目立つ存在となっている場合、現在の信仰に影響を与えることになっている。

そういう意味では聞仲、黄飛虎、申公豹などの人物も同様である。そのもととなった神や人物の設定はすっかり忘れられ、『封神演義』の物語ばかりが知られるようになり、実際に民間信仰にまで影響を与えることになってしまった。

このように、『封神演義』という一種のフィルターを通ることによって、元明に発展していた民間信仰が、大きく変化していったことは、やはり大問題であると考える。今後とも、『封神演義』が民間信仰に

対してどのような影響を与えたかについては、様々な事例から論じていきたい。

参考文献

1．二階堂善弘監訳『全訳封神演義』（全４巻・二階堂善弘・山下一夫・中塚亮・二ノ宮聡共訳・勉誠出版　2017-2018年）
2．二階堂善弘『道教・民間信仰における元帥神の変容』（関西大学出版部　2006年）
3．二階堂善弘『明清期における武神と神仙の発展』（関西大学出版部　2009年）
4．二階堂善弘「二眼の二郎神」、『東アジア文化交渉研究（関西大学東アジア文化研究科）』第７号、2014年、217-228頁
5．二階堂善弘「東南アジアの華人廟における『封神演義』の影響」、『東アジア文化交渉研究（関西大学東アジア文化研究科）』第11号、2018年、585-592頁
6．二階堂善弘「二十四諸天における仏道習合について」、『日本中国学会報』第71集、2019年、135-145頁
7．岩崎華奈子「『封神演義』に見える宿命と情義の衝突」、『日本中国学会報』第68集、2016年、107-119頁